追 悼

鏑木政岐先生を想う

村 山 定 男*

鏑木政岐先生が急逝されて早くも3ケ月あまりが過ぎた．12月28日の朝，五島プラネタリウムの国司君から電話があって鏑木先生が亡くなられたのをご存知でしょうかといわれた時は一瞬声が出なかった．鏑木先生が昨春まで館長を務められていた五島プラネタリウムでは毎月学芸委員会というのが開かれて解説内容を協議しているが，わずか1ヶ月あまり前の11月13日にはお元気に出席しておられたし，10月24日には開館30周年記念に星の会々員との懇親パーティがあって，先生の御挨拶もいつもながら活き活きとしたものであった．御通夜，御葬儀に参列しても何か先生がもうおられないなどとは信じられず，「ヤァ，良く来たな」というお声がきこえるような気がしてならなかった．しかし，日が経つにつれて言いようのない悲しみと淋しさがせまってくる．

想えば鏑木先生のお姿をはじめて見てから丁度半世紀にもなる．昭和14年7月に火星が大接近したとき，私が現在勤めている科学博物館で講演会が開かれた．その時の講師が当時まだ若い助教授でおられた鏑木先生で，そのころ毎週のように博物館にかよいつめていた天文少年の私は絶大な興味を抱いて聴講した．生物はいるともいないともわからぬというお話であったが，火星接近の様子を地心座標の図で示されたのが中学生の私には珍らしかった．私は天文学科に進まなかったので，戦後までお目にかかる機会がなかったが，科学博物館に勤めるようになって，しばしばお願いに行ったりお教えを受けることが多くなった．当時麻布にあった木造の教室で講義中の先生を拝見したことがあったが，黒板一杯に球面天文の式を実に整然と書いておられたのが印象的であった．本郷の理学部1号館にもお部屋があって薄暗い廊下から重い鉄のドアを押して入ると，いつも先生の温顔が迎えて下さった．

学生にもいつも明るく接しておられ，大変慕われておられる様子だった．学究的な中にも面倒見の良い先生という印象だった．しかし先生はなかなかの硬骨漢で筋の通らないことと見れば強硬に頑張られた．若い頃にはいろいろ先輩にもたてついたなどの昔話もよくうかがった．何かお願いに行っても，「よし，やろう」と言われれば，卒先実行して下さった．昭和31年に東京急行電鉄が渋谷に文化会館というのを建設することになった時，戦災で東京にはなくなっていたプラネタリウムを設けたいという話が持ち上った．茅誠司先生，萩原雄祐先生，岡田要先生といった方々を頭に促進委員会や準備委員会などというのができ，実際の推進役は鏑木先生をはじめ広瀬秀雄，畑中武夫，藤田良雄各先生，それに科学博物館で私の上司だった朝比奈貞一先生などが大変お骨折りになった．鏑木先生は卒先してあちこち交渉やら依頼やらに奔走され，私はいつもお伴をして歩いたのであった．

プラネタリウムを作るからには興行的な営利施設ではなく，教育的機関でなくてはならないというのが全員の意向だったが，鏑木先生は特に強く主張された．東急の五島慶太会長の名を冠した五島プラネタリウムが，独立した財団法人の天文博物館として誕生したのもこうした議論の末だったのである．後に鏑木先生が館長を引受けられたのも，天文教育機関としてのプラネタリウムに情熱をもやしておられたからにちがいない．そうした御熱意は水野良平先生を学芸課長に迎えたり，野尻抱影先生に星の会の会長をお願いしたりする際の説得ぶりにもよくうかがわれた．あまり表面に出ることを好まれない野尻先生のお宅に2人でうかがって，和室の書斎に3時間以上も座りこんでやっと引き受けていただたことなども今はなつかしい想い出である．

思えばその頃の鏑木先生はまだ現職の教授で，今の私などよりはるかにお若かったのである．渋いロマンスグレーの中年紳士で，酒席でも青二才の私などよりはるかにスマートであった．軽やかにダンスのステップもふまれたりした．私や若い解説員たちをつれだしてしばしば飲みに歩かれたが，支払いはいつも御自分でサッとすましてしまわれるのに恐縮した．酒の飲めないような奴は駄目だなどとも放言されたが飲んでも決して乱れるような方ではなく，大きな声で豪快に如何にも愉快そうに話された．金沢の由緒ある家系の御出身とうかがっているが，古武士の風格といった印象が深かった．お若い頃からスポーツもお得意だったようで，ゴルフの御自慢話などもよくうかがった．プラネタリウムのおかげで，ほとんど毎月一度はお目にかかる機会があったので，御動静は絶えず承知していた．ここ一両年少しお耳が悪くなられたようなのが気になっていたが，まだまだ長生きなさるものとばかり思っていたので御入院のことさえも知らず誠に残念なお別れをすることになってしまった．しかし先生の誰にもわけへだてのない懇切な御指導や暖かいお人柄は何時までも私たちの心に残るにちがいない．

* 国立科学博物館